

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「CCC、家族や友人へTポイントギフト開始」
- 2) 「ライオン、現代人のかぜとの付き合い方に関する実態調査」
- 3) 「衣料品からバイオエタノール製造」
- 4) 「ペットボトルから割りばし製造」

1) 「CCC、家族や友人へTポイントギフト開始」

「Tポイント」を運営するカルチュア・コンビニエンス・クラブ（CCC）は、2011年11月1日-11月30日まで、家族や友達にポイントを贈れる「Tポイントギフト」のサービス開始を記念したスタートキャンペーンを実施すると発表した。

Tポイントギフトは、「Tポイントを家族にプレゼントしたい」「お友達同士それぞれ貯めたTポイントを一緒にまとめて使いたい」といったT会員の方からの要望に応える形でスタートしたサービスだ。

Tサイトを利用して家族や友達にTポイントを1ポイントから贈ったり・受け取ることができる。受け取ったポイントは、Tポイントが使える全国の店舗やサービスで利用することが可能。

同キャンペーンでは、Tポイントギフトを利用して友達や家族など5人以上にポイントを贈り、贈られた人の5人以上がポイントを受け取った場合、ポイントを贈った先着7万人にもれなく300ポイントをプレゼントするというもの。（キャンペーン対象となる贈るギフトポイント数は、1人に対して10ポイント以上1万ポイント以下）

コンビニでも溜まる、加盟店舗も多いTポイントをプレゼントできるのは価値がありそうだ。それだけでなく、友達や家族と一緒にまとめて使えるので、自分一人の少ないポイントも集めれば大きな額となることが嬉しい。プレゼントの新しい形なのかもしれない。

2) 「ライオン、現代人のかぜとの付き合い方に関する実態調査」

ライオン株式会社は、現代人のかぜに対する意識や実態を明らかにするため、全国の20代-50代の有職男女1000人に対して「現代人のかぜとの付き合い方に関する実態調査」を実施した。調査は複数項目に分けて行い、回答結果を発表している。

Q1：あなたがかぜをひいた時、損したと思う金額はいくらですか。

年代別では、30代（2万4097円）、40代（2万9948円）が高くなっており、特に働き盛りで忙しい世代はかぜによる代償が大きいと感じているようだ。代償の内訳は「会社など

を休んだ日の日給)、**「体調不良による仕事や家事の効率低下」**、**「薬の購入代とその手間」**などがあげられた。

Q2：かぜに対する意識

働く男女の64.1%が**「かぜをひいても翌日会社を休めない」**と回答しており、3人に2人は、仕事が忙しく**「かぜをひいたくらいで仕事を休むわけにはいかない」**と考えていることが分かった。

※また、かぜを理由に仕事をズル休みしたことがあるか」という質問には78.9%が**「いいえ」**と回答した。

Q3：会社の同僚や上司、部下が何℃以上の熱があったら会社を休んでも仕方がないと思うか

48.8%の人は**「37.6℃-38.0℃」**と回答し、平均は**「37.9℃」**でした。さらに、**「38.1℃以上」**の数字を答えた人は20.0%であり、熱があっても簡単に会社を休めない実態が明らかになった。

Q4：「明日は休めない」という大事なときに限ってかぜをひいたことがあるか

68.5%が**「ある」**と回答した。「明日は休めない予定」の1位は**「納期がせまった仕事があるとき(36.9%)」**、2位**「旅行(28.5%)」**、3位**「社内会議(24.2%)」**、以下**「商談(22.5%)」**、**「仕事のプレゼン(22.3%)」**と旅行以外はすべて仕事に関する予定であり、**「大事な仕事の前はかぜをひいたくらいでは休めない」**と考える現代人が多いことが明らかになった。

もちろん責任感があるからだろうが、**「風邪くらいで・・・」**という回りの目を気にして無理をしてしまうという人が多いのではないだろうか。こじらせたり他の人にうつしては元も子もないので、自分で判断して最善の策を取らなければならない。最も、責任感があれば自己管理も行えるはずだ。これからの季節、注意が必要になる。

3) 「衣料品からバイオエタノール製造」

ユニクロやH&Mなど低価格ながら高品質のファストファッションが人気を集め、数多くの衣料品が消費される一方、衣料品は古着店によるリユース以外、リサイクルの選択肢が少ない。リサイクル事業を手がける**「日本環境設計」**は、衣料品からバイオエタノールを製造する技術を開発。衣料品メーカーや流通企業とも連携して回収システムを整備、新たなバイオエタノール製造システムの構築に乗り出した。

バイオエタノールは現在、トウモロコシなどの穀物から作られるのが主流だが、製造に必要とされるセルロース成分は綿にも含まれる。同社はこれに着目、大阪大の研究室との協力により、2007年に綿を特殊な溶剤で溶かし、バイオエタノールを製造する技術を開発した。綿1トンから最大700リットルのバイオエタノールが製造できる。

衣料品は必ずしも綿 100%ではないが、この技術では綿成分だけが溶剤に溶けるため、ポリエステルなど他の繊維は溶け残って分離される。溶け残った他の繊維はコークスや炭化水素油などとして工業用の原燃料として活用される。現在、製造されたバイオエタノールは、染色会社のボイラー燃料として販売されており、食料品以外から次世代燃料抽出の道を開いたともいえる。

当初、バイオエタノール 1 リットルを製造するのに 1 万円以上かかったが、試行錯誤の結果、セルロース成分を効率的に溶かす方法を突き止め、販売価格を 1 リットル 200 円程度まで下げることに成功した。高尾正樹専務は「近い将来、日本国内でバイオエタノールを燃料とする自動車が開発されれば、大量生産によるスケールメリットによりさらなる低価格化の可能性も出てくる」と期待を寄せる。

問題は、原料となる綿衣料の安定確保が難しい点にある。中小企業基盤整備機構の調査によると、日本では年間約 200 万トンの繊維製品が廃棄され、半分の約 100 万トンが衣料品だ。衣料品に含まれる綿成分の割合は平均 50-60%で、年間 50 万トン以上のエタノール原料が不要となっている計算だが、「古着への活用も含め、衣料品のリサイクル率は現在 15%程度」（高尾専務）にとどまる。

ペットボトルのように、廃棄される衣料品の約 8 割が回収できれば、年間最大 28 万キロリットルのバイオエタノールが製造できる計算となるが、自治体などによる廃棄衣料の回収はほとんど行われていないのが現状だ。

そこで同社は、衣料品を製造・販売する各メーカーや流通企業に呼びかけ、「FUKU-FUKU プロジェクト」と銘打った衣料品回収活動を立ち上げ、運営を担っている。

同プロジェクトは 10 年 6 月からスタート、現在はイオンリテールや丸井グループ、良品計画など 8 社 363 店が参加する。参加企業は自主的に年数回程度、消費者から衣料品を回収するキャンペーンを実施し、回収した衣料品を日本環境設計に提供する。

廃棄物は原則、自治体を超えて配送することができないため、参加企業は衣料品の提供者に粗品を渡すなど、「商品」として回収する。今年 8 月までの回収量は約 30 トンにとどまるが、規制緩和の兆しもみられており、参加企業のコストが軽減される可能性も出てきた。高尾専務は「ペットボトルなどはメーカーが積極的にリサイクルを行っており、衣料品もそうあるべきだ」と話している。

ファストファッションの流行で、衣服の消耗頻度も加速したと思う。簡単に買ってしまうから簡単に捨ててしまうという流れに拍車がかかれば、年間廃棄量はますます増えるのではないかと。ペットボトルのリサイクルが生活に馴染んできたように、こうした生活者に声の届きやすい大きな企業が先頭を切って衣類のリサイクルも推進してもらいたい。また、リサイクルすることも大切だが、それと同時に物を大切に作る心も養わなければならないと思う。

4) 「ペットボトルから割りばし製造」

食品卸大手の甲信国分（山梨県甲府市）とプラスチック製造の ES 製品事業組合（笛吹市）は 1 日、ペットボトルの材料となるポリエチレンテレフタレートを使った割りばしの開発に国内で初めて成功したと発表した。

ペットボトルと同じように捨てることでリサイクルの流れに乗せることができる。
木製の割りばしは、中国での需要拡大を受けて値上がりが続いているといい、甲信国分の取引先の弁当店が「ペットボトルではしが作れないのか」と問い合わせたのが開発のきっかけ。500ミリ・リットルの廃ペットボトルを砕いたペレットから1-2膳製造できる。太い部分に「PET」と表示するほか、店頭のパスターなどでペットボトル同様の回収が可能なことを周知する。

PETは、厚みがあるものを作る際、透明感を出すのが難しい素材だが、成型時に金型から外すまでの時間を短くすることで、透明化に成功した。

1膳5円弱での販売を目指しており、今月中に製品用の金型を完成させ、年末から県内を中心に発売。使い捨ての木製割りばしが多く使われる弁当店や食堂での普及を目指す。

弁当や行楽用の木製割りばしの国内消費量は、年間120億膳余りとされており、甲信国分は2012年度に市場の3%にあたる約4億膳の販売を目指す。

中国製の割り箸の単価は需要増加で高騰しつつも、現在約2円程度。これからも高騰は続きそうで、このプラスチック割り箸も日本製割り箸とほぼ同価格。

コンビニ弁当等を食べた後、容器と一緒に捨てられるようになるのは意識せずにごみの分別に繋がるのでありがたい。木製割り箸と違いリサイクル出来るのも、資源を大切に作る面で大きい。これからの割り箸のスタンダードになっていくのだろうか。